The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	A Cognitive Approach to Degree Expressions : Frame, constructions, and compositionality
Author(s)	木山, 直毅
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59638
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　木山 直毅　）	
論文題名	A Cognitive Approach to Degree Expressions: Frame, constructions, and compositionality （程度表現への認知言語学的アプローチ：フレーム，構文，構成性）

論文内容の要旨

本博士論文は，日本語と英語の程度表現について，認知言語学的な考察をすることで，認知言語学に対し，以下の4つの点に関して貢献を示唆する．

(1) a. 程度表現における百科事典的意味論の重要性
　　b. フレーム意味論に見られる問題点：
　　i. 2 つのフレーム意味論におけるアプローチ
　　ii. 百科事典的知識の形式化
　　c. 構文文法における構成性の意味論

第2章では，Kennedy and McNally（2005）が提案したスケール構造を概観する．Kennedyらは，様々な経験的事実に基づき，スケールを4つのタイプに分類した．そのうちの1つが程度副詞との共起である．例えば，*completely/totally/almost empty*とは言えるが*completely/totally/almost tall*とは言えない．このように，*totally*や*completely*，*almost*のような最大及び最小を表す副詞と共起するスケールを閉鎖スケール，それらと共起しないスケールを開放スケールと呼んだ．

まず，第3章では，enough構文を中心に，比較の基準がフレーム意味論的知識に依拠する場合があることを提案する．第2章で概観したスケール構造に関する先行研究には，共通した前提がいくつかある．まず1つ目に，程度概念とは2つのモノを比較しているということである．もう1つは，その比較されるモノはいずれも程度性概念を持つということである．例えば，*My son is tall*という命題においては，子どもの身長とその子どもの年齢における平均身長（例えば140cm）の2値を比較し，命題が真であるということは子どもの身長が平均身長を上回っている場合に限られる．この場合，平均身長を参照にしていることから，「比較の基準（standard of comparison）」と呼ばれ，原級の場合，基準値は文脈に依存する．

そこで，次の [Adj. enough to VP]の表現（以下，enough構文）について考えてみたい．

(3) He is <u>tall enough to</u> ride a roller coaster.

Jensen（2014）は比較の基準が形容詞に内在していると考えている．しかし，もしJensenの指摘が正しいとするならば，第2章で概観した程度副詞の修飾を説明することができない．即ち，形容詞に基準が内在しているとすれば，（3）のように*almost*が開放スケールと共起しない理由とenough構文においては共起ができるようになる理由が説明できない．

(3) a. * Its tunnels were <u>almost big</u>.
　　b. * He is <u>almost old</u>.

(4) a. Its tunnels were <u>almost big enough for me to go down</u> … (BNC)
　　b. Here was this young creature, beautiful and restless, married to a man <u>almost old enough to be her grandfather</u> … (BNC)

以上の例から，Jensenの指摘を支持することはできない．

次に，（5）を用いてもう1つの考え方を紹介したい．

(5) A tall basketball player is someone above 2.00 meters high. John is 1.98 meters, so he is <u>almost tall</u>.

(Rotstein and Winter (2004: 279))

既に（3）で見たように，*almost*は開放スケールと共起しにくい．しかし，RotesteinとWinterは（5）の例から文脈から比較の基準が明らかな場合に限り*almost tall*は容認できることを指摘した．この指摘を踏襲するならば，形容詞に基準値が内在していると論じたJensenとは対照的に，enough構文においては比較の基準が明確に表されているということ

になる．このことを踏まえ，博士論文では百科事典的意味論に立脚し，補部が程度概念を喚起し，比較の基準が補部で表されていることを提案する．例えば，（4a）においては「トンネルを進む」という事態が要求する大きさの概念，（4b）では「祖母」と呼ばれる人の一般的な年齢などである．この提案は，（5）の指摘と矛盾しない形で（4）の説明が可能になる．

次に，第4章では，一般的に段階性を持たない形容詞（e.g., *pregnant*）が段階性を帯びる現象においても百科事典的知識が重要であることを論じる．一般的に形容詞が段階性を持つかどうかは程度副詞との共起可能性に基づいて議論がなされる．例えば，*tall*のような語は*very tall*と言うことができるため， 段階性を持つとされる．一方，*pregnant*のような語は*very pregnant*とは言えないため，段階性を持たないと診断される．しかし，小説やウェブにおいては次のような例が多く観察される（以下，ウェブより）．

(6) a. Even imagining that is pretty impossible, right?
b. But, apart from a small number of men in each Department, it is pretty true to say that the posts available were not likely to attract men of first-rate talent [...].

(7) a. This is relevant because Miss Jane is somewhat pregnant right now (i.e., she is more than pregnant) …
b. Papa was very dead. He had been shot many times and had been bludgeoned.

このような現象において，本稿では（6）と（7）は異なる意味要素を程度化していることを提案する．具体的には，（6）で程度化される構成要素は語彙的に得られる概念である一方，（7）は百科事典的に得られる概念である．例えば，*pregnant*の場合は強調される程度概念は腹部の大きさである．また， においては遺体の損傷具合である．そのため，（8）のようにそれらの意味を否定すると文が矛盾してしまう．

(8) a. * She is so pregnant, but she does not have a big belly.
b. * He is so dead, but his body is undamaged.

しかし，これらは*pregnant*や*dead*そのものに内在する意味ではなく，世界知識によって得られる意味である．このように百科事典的知識を強調する形容詞は，*get pregnant*や*die*のような動的な意味を持っているものである．動的事態は百科事典的意味が豊かであり（e.g., Fillmore and Atkins（1992）），これら形容詞はその知識を継承しているためであると考えられる．

このような百科事典的意味を表すため，本章では新たな図式を提案する．百科事典的意味は， FrameNet（Fillmore and Baker（2010））が詳細に記述している．しかし，FrameNetではどのような意味要素が強調されるのかに関しては記載されておらず，本章が扱っている矯正を適切に書き表すことができない．そこで，本章ではAVMに基づくフレーム表示と図式に基づく程度概念の表示を融合し，diagram-AVMスタイルの概念表示を提唱した．これによって，語彙が文法に影響を与えうる世界知識としてどのような程度概念を持ち，程度副詞によって強調されるのかを表示することができるようになった．

第5章では，日本語のオノマトペ動詞における程度概念に関する分析を通して，日本語動詞に見られる程度概念においてもフレーム意味論の重要性を論じた．Tsujimura（2001）は，日本語の程度副詞「とても」が共起できる動詞は，事態構造にSTATEを持つものに限ることを論じた．

(9) [+STATE]
とても{苦しむ／光る／あたたまる}

(10) [--STATE]
#とても{笑う／叩く／沈む}

尚，（10）は容認できる例ではあるが，（9）とは異なる強調であるため，本稿では除外している（詳しくはMorzycki（2015）を参照）．

この一般化が日本語一般動詞の多くを捉えていることは確かである．しかし，オノマトペ動詞を観察するとTsujimuraの一般化では捉えられない現象が多くあることが分かる．例えば，次の例のように，STATE要素の有無にかかわらず，オノマトペ動詞は「とても」で修飾することが可能である．

(11) [+STATE]
とても{がっかり／きらきら／ずきずき}する

(12) [--STATE]
とても{にこにこ／どんどん／うろうろ}する

以上のように，Tsujimura（2001）ではオノマトペ動詞の振る舞いを捉えることができない．

Tsujimura（2001）の不足を克服すべく，本研究では，日本語動詞の程度性は様態要素において語彙的に顕著な程度性概念が見られる場合，「とても」で強調することができることを提案した．例えば，「にこにこする」であれば，陽気さの程度，「どんどんする」であれば音の強さ，そして「うろうろする」であれば効率の悪さや曲がりくねった歩き方などである．また，「強打する」のような一般動詞においても，「とても」が修飾する意味要素は打撃の強さといった概念である．このように，オノマトペ以外の動詞であっても，顕著な程度性概念が様態要素内に見られる場合には程度修飾が可能である．

様態が文法に影響を与えるという考え方は，フレーム意味論の考え方であり，事態構造分析（e.g., Pinker（1989））では捉えることができない．そのため，日本語の動詞の程度表現においてもフレーム意味論が重要であることが分かる．以上の分析を第4章で提案したdiagram-AVMスタイルの意味表示をすることで，どの意味要素が強調されうるのかというFrameNetが抱える問題点を克服した．

最後に，第6章では（1）で挙げた本博士論文が認知言語学にもたらす貢献を論じた．即ち，程度表現における百科事典的意味論の重要性，フレーム意味論における複数のアプローチ，百科事典的知識の形式化，そして構文文法論における構成性である．

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（木山　直毅　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	春木　仁孝
	副 査　教授	井元　秀剛
	副 査　准教授	早瀬　尚子

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、主として英語の形容詞と日本語のオノマトペ動詞の分析を通して、認知言語学の観点から英語と日本語における程度表現について認知言語学の立場から考察した研究である。

これまで程度表現は形式意味論においては一定の研究がなされてきた。本研究では先ず形式意味論における程度表現の最近の研究動向を概観する。一般に、totally emptyやalmost emptyのように最大や最小を表す副詞と共起する場合は閉鎖スケール、一方、tallのようにcompletelyやalmostと共起できないスケールは開放スケールとされる。

第3章では、形式意味論などにおける観察にも関わらず、たとえばenough構文においてはIts tunnels were almost big enough for me to go down...のように開放スケールの形容詞がalmostと共起する現象を取り上げて、このような現象に関しては真偽値に基づく意味論では説明することができず、百科事典的知識を考慮するフレーム意味論に立脚する必要があることを論じる。enough構文には、後続のto不定詞にbe able toのようなモダリティ表現が来ることができるenablementと、そのような要素の共起できないenforcementという二つの場合があることを論じ、このような二つの意味がforce-dynamicsの考え方を援用することで説明がつき、enough構文だけでなく、ある種の形容詞構文にforce-dynamicsの考え方を拡張できることも示している。4章ではpregnantやdeadなど段階性を持たないとされる形容詞が時にveryなどによって修飾されて段階性を帯びるようになるtype shift現象を取り上げて、これらの現象は語彙的に内在する意味から説明できるものではなく、deadやpregnantなど動詞表現に対応する形容詞が段階性を帯びて用いられている場合はget pregnantやdieといった動的な意味を継承しており、そのような動的な事態が豊かに持つ百科事典的意味から事態の見方が精緻化される（fine-grained）というcoercion（強制）を受けた結果として説明されるとしている。同時にそのような百科事典的意味を取り込んだフレーム意味論を図式化することを試み、Fillmore達が提唱するFrameNetの不足を補う形での概念表示の提案をしている。

次に日本語のオノマトペ動詞と程度概念の問題を取り上げて、やはりこの現象の説明においてもフレーム意味論によるアプローチが有効であることを示している。これまでの研究では、程度副詞「とても」はその事態構造にSTATEという特性を持つ動詞のみを修飾できるとされてきた。しかしオノマトペ動詞は予想に反して、STATEを含まなくても「とても」で修飾できるなど、程度概念の強意を受けることができる。この際、強意を受けるのは動詞の表す事態の様態の中の程度性概念が顕著な特性であることを論じている。

二つの大きな問題を論じた後に、著者はフレーム意味論に見られる意味役割重視の考え方と百科事典的アプローチの二つの流れの統合の必要性を主張し、Fillmore達のFrameNetは認知言語学における重要な成果であるがその図式では本論文が扱った程度概念のような百科事典的知識は表すことができない点を指摘して、その不足を補う形での図式化を提案して、このような図式化によって、語彙意味論と構文文法との考え方を融合することができると主張する。

試問においてはenough構文や、very+形容詞がどのような意味で構文と認定できるのかといった点や、強制coercionを受けて事態の見方が精緻化されるということと百科事典的知識との関係はどのようになっているのかについての詳細な議論がほしいこと、また日本語のオノマトペ動詞の振る舞いをさらに詳しく分析する必要がある点などが指摘されたが、程度表現という観点から英語と日本語の問題を詳しく論じた本論文は、今後の程度表現を考えるうえで出発点になるものであり、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。